

# 広島芸術学会活動報告

二〇〇〇年七月～二〇〇一年六月

米 門 公 子

▼平成十二年七月十四日（金）

第十四回総会・大会案内も兼ねた会報第五十八号を発行。掲載記事は大会の日程や研究発表者などのレジュメ、第五十二回例会報告「波間をかける潮風のように、しまなみアートを駆け巡った章魚（たこ）足例会」（報告者・津島由里子）を掲載した。

▼平成十二年七月二十九日（土）

第十四回総会・大会を広島市南区の県立広島女子大学で開催した。午前十時から十時半までが総会。進行役は広島大学の安西信一委員が務めた。金田督代表委員の開会挨拶の後、開催会場である広島県立女子大学の石川一委員が歓迎の挨拶と会場や会場周辺の説明をした。続いて金田代表委員が水島裕雅委員を議長に指名、議事に入った。

まず最初に長田年弘委員が平成十一年度の事業報告と決算報告、続いて倉橋清方監査委員が監査報告をし、それぞれ承認された。引

き続き、長田年弘委員が平成十二年度の事業計画と予算案を提出し、そのまま承認された。その後青木孝夫委員が二つの報告を行った。

一つは年報の末尾に掲載されている当学会会則「三、事業」の項目に「年報」を加えること。また、来年度は委員改選や投稿規定について見直しを行いたいので、前もって原案を会員に送付するつもりであると発言した。

十時からいよいよ大会開始。午前中に二つの研究発表を行った。

トップバッターは社会人で広島女学院大学大学院に在籍中の鈴木榮子氏。「いけばなの変遷―盛花流行の背景」と題し、歴史とともに変化するいけばなについて、明治期を中心とした変遷に焦点を当て、生花から盛花への歴史的受容の変化を考察した。

二番目の発表者は、広島大学大学院の能登原由美氏。発表のタイトルは「ウィリアム・バードの創作活動における楽譜出版の意味」。これまでのバード研究では、バードと楽譜出版との問題についてあまり触れられていないが、同氏はバードの創作活動にとって楽譜出

版の持つ意味は大きいと考え、この部分に焦点を当てて発表した。

午後の最初の発表者は広島国際学院大学の岩崎峰子氏。ベン・ジョンソンの『黒のマスク』という戯曲を対象に、パトロンであるジームス六世の（あるいはその周辺の人々の）意を受けての作品創作という面に光を当てて発表を行った。タイトルは『黒のマスク』についての「考察」

京都・国際日本文学研究センターのマーク・メリ氏は、欧米における日本文学の研究について発表した。タイトルは、「異文化解釈としての美学の価値と可能性を巡って」。ある文化を他の文化と比較することの難しさを改めて浮き掘りにする発表だった。

大会の締めくくりは、シンポジウム「日本の感性の特徴と歴史性」。司会は青木孝夫氏（広島大学）、パネリストは太田孝彦氏（同志社大学）、水島裕雅氏（広島大学）、萱のりこ氏（大阪教育大学）。太田氏は、書画の展示法が、15世紀半ばに確立したことを多くの画像資料で示した。水島氏は明治期に文学のモデルが中国から西洋へシフトした際の可能性の現場に立ち戻るべく、詩歌感を一変させた『新体詩抄』を精査した。萱氏は「書は芸術か」をめぐる小山正太郎と岡倉天心の論争（明治15年）および揚守敬の来日（明治13年）を取り上げ、書にとつての近代の多義性を説明した。

大会後、ピヤガーデンで懇親会を開催。参加者は28名だった。

▼平成十二年九月五日（火）

会報第五十九号を発行。巻頭言は倉橋清方氏の「境界 カミとヒトの領域」。「自然の営みは人智の及ばざるところ、いわばカミの領域」であるにもかかわらず、最近のヒトは、遺伝子操作やヒト・ゲノムの解説など、まさにカミの支配の聖域に踏み込もうとしていることへの危惧を綴った。

大会報告は、岩崎峰子氏の『黒のマスク』についての「考察」（報告者・大山範子氏）、マーク・メリ氏の「異文化解釈としての美学の価値と可能性を巡って」（報告者・長迫英倫）、シンポジウム「日本の感性の特徴と歴史性」（報告者・安西信一）を掲載。

自由コラムには、袁葉氏が、「月下情懷」と題して、中国で開催された「東方美学国際学会」に参加した研究者たちの心温まる交流風景を寄稿した。

▼平成十二年九月十二日（火）～十七日（日）

広島芸術学会第三回芸術展示「制作と思考」を広島県立美術館・県民ギャラリーで開催。出品者は会員四十九人。今回はさまざまなジャンルの会員がいる広島芸術学会らしく、「広島2000ー境界と交流」をテーマにかかげ、詩人や学芸員らも作品を出品した。入場者数は約千五百人。この企画は反響を呼び、中国新聞にも写真入りで大きく掲載された。

会期中の九月十五日（金）に第五十三回例会「本音で語ろうー私の制作」と題するシンポジウムを同美術館・講堂で開催。司会は比治山大学の寺本泰輔氏、パネリストは、芸術展示に作品を出品した才田博之氏（平面造形）、沼本秀昭氏（平面造形）、木本一之（金属造形）、椎木剛氏（書）、藤土千浩氏（音楽・生活美学）の五人。制作現場からの本音を語った。

▼平成十二年十二月五日（火）

会報第六十号を発行。巻頭言は広島市現代美術館学芸員の出原均氏が、「台北と上海の旅」を執筆。台北と上海で開催されたアート・ビエンナーレに行った時の印象を書いた。

第十四回大会・野登原由美氏の発表「ウィリアム・バードの創作活動における楽譜出版の意味」についての報告は上野仁氏が、第五十三回例会に開催したシンポジウム「本音で語ろうー私の制作」についての報告は亀井勝朗氏が担当した。

新聞に掲載された広島芸術学会第三回芸術展示の記事のコピーも掲載した。

▼平成十二年十二月十六日（土）

第五十四回例会を広島県立美術館・講堂で開催、二つの研究発表を行った。一つ目は広島大学大学院工学研究科の富田英夫氏の「バ

ウハウス関連建築作品のコンピュータ・グラフィックスによる再現」。CG制作過程において幾何学立体群を組み合わせてできる構成主義的な形態特性のほか、色彩、素材感、照明などの表現効果を確認しつつ、モダニズムの建築デザインの真髄を解きほぐした。

二つ目は、広島市内で会社経営をする傍ら、ライフワークとして「移民・海外移住」のテーマに取り組んでいる小林正典氏の発表。

タイトルは「現代日本と〈移民・海外移住〉を考える」。過去と現在を比較しつつ、「移民（海外移住）」そして日本と世界について語った。

▼平成十三年二月二十七日（火）

会報第六十一号を発行。巻頭言「平和と音楽と教育と」ある音楽大学の現在」をエリザベト音楽大学教授の伴谷晃二氏が書いた。

内容は、昭和二十三年に県公認の広島音楽学校としてスタートした同大学の歴史や現在の状況などについて。

第五十四回例会の富田英夫氏の発表「パウハウス関連建築作品のコンピュータ・グラフィックスによる再表現」の報告は松田弘氏が、小林正典氏の「現代日本の『移民・海外移住』を考える」の報告は大山智徳氏が書いた。

二つのイベントリポートも掲載。一つ目は、広島大学の水島裕雅氏による「広島に文学館を！市民の会」。この会の設立の経緯を説明した。

広島市立大学の大井健地氏が寄せたイベントリポートは、「新世代の子ども平和像の運動」について。平和像を建てようと、広島の高校生が中心になって活動している会への参加と協力を呼びかけた。

▼平成十三年三月十日（土）

第五十五回例会をひろしま美術館・講堂で開催。研究発表の前に開催中の特別展「古伊万里のすべて」を観賞した。同美術館の渡辺淳子学芸員の解説付きだったので、より深く観賞することができた。

一つ目の研究発表は、広島大学大学院の李恩和氏の「広島県所在の韓国鐘について―不動院の鐘を中心に」。広島県所在の三口の高麗梵鐘がどのような経路で寺に置かれるようになったのか、研究成果を発表した。

続いて、岡山大学教育学部の赤木里香子氏が、「明治期における毛筆画教科書の変容―南画ブームから水彩画ブームへ」と題して発表を行った。近代日本の美術教育史研究における課題として挙げられる毛筆画教育時代（明治二十年～三十年代半ば）の実態解明を行った。

▼平成十三年五月十五日（火）

会報第六十二号を発行。巻頭言は帝塚山学院大学の三浦信一郎氏が執筆。タイトルは「もつと静けさをく美は静寂と沈黙にあり！」で、現代の日本社会は、音であふれすぎていないかと問いかけた。

第五十五回例会の報告が三本。ひろしま美術館で鑑賞した「古伊万里のすべて」（報告者・水木洋子）、李恩和氏の発表「広島県所在の韓国鐘―不動院の鐘を中心として」（報告者・表絵美子）、赤木里香子氏の発表「南画ブームから水彩画ブームへ」（報告者・森園敦）。イベントリポートの一つ目に、広島大学の水島裕雅氏が前号に掲載した「『広島に文学館を！ 市民の会』について」の続報、「『朗読会&広島文学を語る』について」を寄稿。

もう一つのイベントリポートは、広島市現代美術館の出原均氏が書いた「アート・クロッシング」。紙屋町地下街、シャレオのオープンに合わせて開催された「アートクロッシング広島プロジェクト 2001スプリング」展の感想を書いた。

▼平成十三年六月二日（土）

この時期には恒例となっている野外例会。今回は筆の産地として全国的に知られる安芸郡熊野町を訪ねた。見学コースは、「筆の里工房」「高本製作所」「高本製作所展示室」の三ヶ所。筆づくりの行程や展示場を見学した。参加者は十五名。

《平成十三年六月三十日現在、法人会員九法人、個人会員二百四十一名（特別会員五名、一般会員二百十名、学生会員二十六名）》。

（こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局）